

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫 その4

I. すずは何故歌えなくなってしまったのか？

幼少期に水難事故で母を失い、その喪失を受け入れることができないまま、高校生になったすずは思春期に伴う喪失的体験の体験を受け止められない、ということが、その要因になっていると考えられる。

思春期の到来によって生じる喪失

一般的に思春期になると、心身の成長の中で、主体性が立ち上がり、親からの自立、自ら人生の岐路を選択し、また成長に伴い、今まで理想な存在であった大人たちへの幻滅も生じ、学童期まで抑え込んできたエディプス葛藤が再び持ち上がり、彼らは自分自身のアイデンティティが揺らぎ、その中でいくつもの課題を抱え、ここの様なことを経て彼ら思春期の世代に年齢の子達は（それが Adolescence Process）その情緒的葛藤を乗り越え、一人前の大人に成長していく。

しかしすずは、幼少期に亡くしてしまった母の喪失が受け入れられないが故に Adolescence Process に伴う喪失・選択・幻滅・独立を受け入れられず、主体的になれず、それに伴うエディプス葛藤から退行している様に感じられる。

母が生きている間、幼い頃のすずは、スマホの鍵盤アプリで曲を作ってイキイキと歌っていた。それは内的世界と外的世界を結びつける潜在空間であると考えている。

一般的にその潜在空間で創造的な遊びを続ける中で、人は徐々に親から分離した一人の個として外的現実の中で主体的に関われる様になっていく。

しかし母が亡くなってしまったことでその空間が剥奪されてしまった。高校生のすずは、外的現実を受け止めきれず、『月の裏側（ヒロちゃん評）』のように外界の世界から距離を置いた生活を送り、幼少期に母と音楽を作っていた幻想の世界にこもっていた様に感じられる。それであるが故に、すずは人前（外的世界に向かって）で歌う（それはある意味、社会に関わる（エディプス葛藤に触れる）こと、）ことができなくなっていると考えている。

→ 一般に思春期の方々が情緒的葛藤から距離をとる時、不登校になってしま
うケースが多い。すすがそうらずに済んだのは、コーラスグループの方々や
しのぶ君達など、すすを暖かく気にかけてくれる存在が大きいと考えられる。

高校生のすすに大切なことは、幼い頃母に見守られながら夢中になって歌い、
音楽作りをしていた空間を取り戻す必要がある。つまりもう一度、潜在空間で自
由で創造的に遊べる様になることが必要。

→そこで、ヒロちゃんから SNS の『U』の招待を受ける。

Ⅱ. すずにとって『U』とはどのような存在であるか？

現実世界のすすは歌えることができなかったが、『U』の世界で、ベルになる
ことで歌うことができ、尚且つ彼女の歌声は瞬く間に高評価をうけるようにな
っていく。そしてそれとリンクするようにすすの現実世界の高校生活が少しイ
キイキと感じられ、彩りを持ち始める。つまり母の死で失ってしまった、すすの
潜在空間のやり直しをヒロちゃんが提供したと考えられる。

これは『U』の空間で歌い続ける中で、すずは分離した一人の個として外的現実の中で主体的に関われる様になっていく。分離个体化が進んだ、つまりエディプス葛藤に向き合う準備ができたと考えられる。

『U』を通じてすずはどのように変わっていったのか？

その様に『U』でのベルの評価が鰻登りに上がっていく中で、すずはある出来事に遭遇する。それは密かに思いを寄せていた、幼馴染のしのぶ君から学校で声をかけられたが、途中、周囲の視線が気になり、踵を返し、振り返ったら時には、しのぶ君とルカちゃんが談笑しており、そこに入れない気持ちになっていた。

その場面は『U』という潜在空間の中で創造的な活動をするなかで分離个体化したすずが、次に待ち受ける心的課題を象徴している様に感じられる。

ルカちゃんはすずにとって憧れの存在であると同時に叶わない対象。そしてすず、しのぶ君、ルカちゃんという三者の関係性のなかですずはエディプス葛藤を強く感じ、そこにはまだ自分はいれないと感じており、今後のすずの課題としてその葛藤に向き合うことが必要不可欠。

→母の死を受け入れられないことによって止まっていた Adolescence Process を進めていくこと

→母の喪失を受け入れ、妄想分裂ポジションの心性から抑うつポジションの心性に移行させていくこと。

→そして『U』にてベルのコンサートに竜が出現してくる（悪い対象）

個人的にはこれがすずが内的世界の中での父の存在（現実世界で、すずが父に対して必要以上に距離をとり、関わることを拒絶しているのは情緒的に触れられることが怖いから）の様に感じられる。

Ⅲ. 竜はすずにとってどのような存在であったのか？

1. 竜とは？

『U』の世界でモンスター型 As。黒い竜のような獣の姿をしている。

背中に複数の痣があり、暴力的で『U』の世界に存在する武道場に乱入しては「道場破り」を繰り返し、As 達から忌み嫌われている。

しかしベルはその存在に怯えながらも、非常に気になってしまう。そして竜という人物が実際どんな人物なのかの詮索が始まるが、その多くがネット上では華やかな生活をしているように見せかけているが実際は孤独でひとりぼっちで、そんな本当の自分に触れられないように攻撃性が強いことが見えてくる。

→その存在こそ、すず自身が距離を置き、分割して、否認してきた自身の情緒であり、それを外的世界に投影し、悪い対象としてきた。しかし、すずは、ここでそこに向き合おうをし始めているように感じられる。

「傷つけられる……。竜の背のあざ……。もしかしたら……。」

すずはその竜の姿になにか惹きつけられる。ある種の自身の傷ついた心の投影である。そして竜に強い関心を持ち、竜のお城へと入っていく。

2. 竜と出会うこと、そして現実でおきたこと

1) はじめての竜との関わり～現実での出来事

竜のお城に導かれるように入っていったベル。

そこで竜に出会うが、ベル（すずの As）に対し、竜は恫喝するが、周囲の As に対して優しい竜をみて、すずは物想いに耽る。（「すずが恋してる。それも、悪そうな男に」）そしてアドバイスに従い歌を作ってみようとする。

【考察】

この過程は竜が投げ込む β 要素（心に消化できないモノ）をベルが受け止め、ベルは困惑しながらも考え、物想いに耽り、受け止めそして返そうとする（ α 機能、 α 要素）過程とも考えられる。

それは『U』の世界では、竜の β 要素をベルが受け止めたが、一方で、現実世界ではベル＝すず自身が自身の色々な未消化な情緒に関心を持ち、それを受け入れようとしている。学校内でしのぶ君との有らぬ噂を立てられ、それをヒロちゃんと一緒に必死にかき消した。ある種、そのしのぶ君とも噂もすずの内的世界の投影を必死に打ち消そうとした行為の样にも感じられ、すずはもがきながらも現実世界に徐々に主体的に関わっていこうとしているように感じられる。

また、で現実の世界ですずはルカちゃんからメールのメールを受ける。その内容は好きな人のことで話を聞いてほしいという内容であった。その後、しのぶ君に会っても「こんな私のことなんか、もう気にしなくていいんだよ。」といい、（この背景にはしのぶ君と対等な関係になりたいという思いもあるように感じられる。）自分の思いを打ち明けられない、一方でルカちゃんに「応援しているから」（ルカちゃんのようにいつも明るく前向きでいたい憧れ）というメールを送り、すずは「私、どうしたいんだろう」と言ってボロボロと泣き出す。

主体的に関わることは、これまで回避してきたエディプス葛藤に向き合うということ。しかしそのその中に入っていくことで、これまで抑え込んできた、憧れや嫉妬に伴う様々な情緒が溢れ出て、そんな自分にすずは驚き、混乱しているように感じられる。

2) 竜の前で歌うこと

竜は以前と同じようにベルに対して拒絶した態度をとるが、ベルがジャスティン達に取り囲まれ尋問され、脅されるところに竜は助けにくる。ベルはその優

しさに触れ、自分が作った歌を竜の前で歌う。

一人にして欲しいと あなたは突き放すけれど

本当は胸の中にあるものを 覗かれたくないのでしょう

怒り 恐れ 悲しみ

抱えきれぬ夜

でも口にできない

聞かせて 隠そうとするあなたの声を

見せて 隠してしまうあなたの心を

その歌に徐々に竜は心を開き、ベルと一緒に踊り、楽しいひと時を送るが、割れる物音と共に、その和やかな雰囲気は一変してしまい、竜は苦悩し、ベルは何もできず、途方に暮れてしまう。

【考察】

この歌はベルが竜への想いの歌を綴った歌だが、一方で、自分自身がどうしたらいいのか解らない、その感情を素直に綴った歌のようにも感じられる。そしてそれはルカちゃんやしのぶ君といった憧れであるが、彼らには敵わないエディプス葛藤にまつわる情緒であり、そこに向き合おうとする（ルカちゃんや、しのぶ君と対等に関わりたい）が、なかなか素直にできない苦しさを歌っているようにも感じられる。

→そしてルカちゃんとの関わりが始まる

3) ルカちゃんとの対話

学校帰りの駅で待合室のベンチで座っている。そしてすずの存在に気づくと立ち上がり、すずに近づく。

ルカ：すずちゃん

すず：…ルカちゃん…

ルカちゃんはなにか切羽詰まった様な表情をしている。

二人は停留所を降りて沈下橋まで歩く

ルカ：座礁しちゃった。

すず：座礁？

ルカ：鈴ちゃんが応援してくれたから、勇気を出して船出しようって

すず：うん

ルカ：でも好きな人の前だと、何も話せなくて。

すず：うん

ルカ：そしたらその人、『なに、そのリアクション、キモいんですけど』って…

…。

すず：ええっ！！何それ！！

ルカ：ううん。言われても仕方ないの。私が全然自信がないのが悪いんだし、実

際キモいし……。

すず：そんなわけないよ！そんなのひどいじゃん！もうっ！！しのぶ君ひど

い！！

ルカ：え、違う違う

すず：あれ？……じゃあ？

ルカ：……ちかみくん

すず：ちかみって？

ルカ：ち、かみ……しん、じろう……

すず：カミシン！！！！

その後、ルカちゃんとすずは自宅の縁側で二人腰をかけて語らう。

ルカ：すずちゃんが誰が好きなのか、わかっちゃったな

すずは焦って手で制す。

すず：あ、ダメ、言わないで死ぬから

ルカ：うん。でも、いつから？

すず：6さいのとき、『僕がまもってあげる』って言ってくれた。最初にそれを

聞いて私、プロポーズされたと思って。でも、本当は、『いじめる奴がいたら守

ってあげる』って意味だった。プロポーズなんかじゃもちろんなくて。

すず：母が亡くなって、泣いてばかりいたから、クラスの子みんな怖がって誰も近寄れなかったの。それで、いじめられてると思ったんだろうね。だから……。

ルカ：ちょっと変なこというけど、わたし、その人のこと、なんだかお母さんみたいだなあって思ってたんだ。

すず：お母さん？

ルカ：だってなんにもないのに『大丈夫？』とか『平気』とかいつも聞いているでしょ？男子なのに不思議だよね、しのぶくんって……。あ、いっちゃった。フフ

すず：ハハハ。死んだ。

そして二人で笑う。

【考察】

『U』の中ですずの As であるベルが竜と情緒的交流をすることで、現実の世界のなかですずは徐々に自身に向き合い、エディプス葛藤に向き合おうとする。その中でルカちゃんに会い、ここでルカちゃんが完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。それはすず自身が、抑うつポジションを受け入れつつあり、成熟したからこそ知ることができたと感じられる。

なぜなら、もし成熟できておらず、殻に閉じこもったままであれば、そこまでルカちゃんがしんみりした感じで、すずに語ることもなかったし、もし語ったとしてもすずはその言葉を真意と受け入れられず、「(ヒロインである)ルカちゃんがそんなこと思うわけない」と感じたのではないだろうか？つまり同じ立場の人であると受け入れられなかったのではないだろうか？

その後、ルカちゃんはカミシンに思いをつげて、受け入れられ、付き合うことになる。

4) ジャスティンとは？

ジャスティンは『U』の正義と秩序を守ると主張し、その世界を脅かす竜を追っている。

多数の企業とスポンサー契約しており、As を強制的にアンベイルする効果がある緑色の石を持っている。

「引き締まった筋肉の堂々たる体躯は強さと勇ましさを思わせ、それを包むバトルスーツは、高潔な人格を想像させた。まさにヒーロー、英雄、偉丈夫、正義の味方、救世主に呼ぶに相応しい（小説版）」

ジャスティンはすずの超自我的側面であるように感じられる。すずはこれまで、自身の強い超自我に支配され、ある種その強固な枠を自分で作り出し、窮屈な生活を送ってきたと考えられる。

超自我とは？

自我を観察し、命令を与え、裁き、処罰によって脅かす存在。肛門期からエディプス期にかけて形成されていく。

ジャスティンが竜を捉え、竜の城を崩壊させたように、これまでのすずは自身の強い超自我により、自身の中にある孤独感や怒り、そして寂しいという情緒を悪い内的対象と捉え、そういったものを撲滅させようとしてきたように感じられる。

しかしベルがジャスティンの尋問に対して竜の住処を教えることを拒絶したようにすずは、これまでの強烈な超自我の在り方に疑義を感じ、すずの自我がその超自我に対して抵抗しているように感じられる。ある種、内的な世界での反抗期のようにも感じられる。

5) 自分を『U』のなかでアンベイルするということ

すずは、『U』のなかでベルとして振る舞い、歌姫として周囲から評価されるなかで、徐々に自信を取り戻し、「月の裏側」のような存在だった彼女が、「お日

様のように皆が集まってくる」とうてい近づけない対象と考えていたルカちゃんと対等に扱われるようになる。

一方でしのぶ君に『U』の中のベルとすずが同一であるということを見抜かれてしまい、すずは非常に動揺してし、しのぶ君がいる場から立ち去り、泣き崩れてしまう。その前にジャスティンに竜の住処を教えないとアンベイルするぞ！と脅迫したシーンがあったが、そのこととなにかリンクしているように感じられる。

交差点でしのぶ君が、道を挟んで すずに問いかけるシーン

しのぶ君：すず！

すず：……あ…

しのぶ君：カミシンいた？

すず：うん。ううん。

しのぶ君：どっち？

すず：うん。ううん。

何台かの車の音が、二人の間を走り抜ける。服や髪が、埃っぽい風になびく。

しのぶ君：すず、あのさ……。俺、ずっとすずに言えなかったことがあって。

すず：え？

しのぶ君：すずさ…

すず：あ……！

すず：し、しのぶ君ごめん！わたしも、しのぶ君に言えなかったことがあって。

しのぶ君：……ああ

すず：わたし、実は

しのぶ君：わかっているよ

すず：わたし、実は…し、…

しのぶ君：すず、ベルだろ。

すず：え？

しのぶ君：本当はベル、すずだろ。

すずはあまりのショックで茫然自失になり、全身がワナワナと震えてしまう。

すず：あ！あああああ！！！！

しのぶ君：すず！！

すず：ち、ちち、違うよ！！

しのぶ君：すず！

すず：違うよ！！

自動車は何台も二人の間を通り過ぎ、大きな風を舞い、しのぶ君は目を細める。

そして全てが通り過ぎた後、すずはいなくなっていた。

しのぶ君：あ…… すず、どこ、すず？

すずは仁淀川沿いの河原まで、走って逃げてきた。

すず：あああああ、どうしよう！！ もう二度としのぶ君の前に出られない。出

られない……。

すずは両手を顔で隠して、震えながら泣き出す

【考察】

『U』の中でベルとして振る舞うことは、ある意味、すずが幼少期に鍵盤アブリという対象を発見し、それを自分のものとして、使い、母に見守られながら、音楽を作り、歌い、遊び、徐々に外的現実に触れていこうとする様であった。そこから徐々に外的現実にはすずは触れていった。そして自身のエディプス葛藤にも向き合い、ルカちゃんと対等な存在としてすずは成熟しようとしている様に感じられる。しかし一方で、『U』の中のベルはすずにとっての万能空想であり、それは自身の幼児性の部分であり、『U』のなかのベルと現実世界でのすずとの間でアイデンティティの確立がまだできていない状態であったと考えられる。そこをしのぶ君に直面化され、すずは混乱し、取り乱したものと考えられる。そこでヒロちゃんから『U』の中で竜が大変なことになっているという知らせを受ける。